

自分を守る！

ビジネスにつなげる！

社会貢献をする！

1. 2. 3. その他防災関連事業者

4.

21 レジリエンス人材を育成している例

事例番号 166

災害時に役立つ暗闇体験

■取組主体 一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティ
 ■業種 サービス業（他に分類されないもの）

■取組の実施地域 東京都（渋谷区）
 ■取組関連 URL <http://www.dialoginthedark.com/>

取組の概要

暗闇の中での災害時対応を体験する「エマージェンシーワークショップ」

- 一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティは、普段、意識しない視覚以外の感覚を使うための機会と場を提供する「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」プロジェクトを推進している。参加者は、光を完全に遮断した暗闇の中にグループで入り、「アテンド」と呼ばれる視覚障がい者スタッフのサポートのもと、中を探検してさまざまなシーンを体験する。その過程で、視覚以外の様々な感覚の可能性と心地よさに気づき、コミュニケーションの大切さや人の温かさを思い出すことなどを重視した取組である。
- 東日本大震災以降、この「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」の特別版として、暗闇の中で視覚障がい者に導かれながら、緊急事態や災害時などに求められる助け合いや伝達、リーダーシップなどを育むことを目指したイベント「エマージェンシーワークショップ」を開催している。



【暗闇ワークショップの事前説明の様子】

取組の特徴

きっかけは「災害時ワークショップ」に適しているとの周囲の後押し

- 同法人の前身となる特定非営利活動法人ダイアログ・イン・ザ・ダークは、視覚障がい者スタッフのサポートのもと、暗闇の中を探検してさまざまなシーンを体験する「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」に関する事業を行うために、平成14年秋に設立された。
- 「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」の「エマージェンシーワークショップ」は、故・森稔氏（元森ビル会長）より、災害対策ワークショップに適している、と評価されたことがきっかけとなり、平成23年5月10日～20日に震災チャリティ企画として六本木アカデミーヒルズ40階で開催された。
- 暗闇では、最も情報量の多い視覚を手放すことによって、災害時と同じように「日頃の常識が通用しない環境」を実際に体験することができる。警報音を流すなどの工夫を組んだ「エマージェンシーワークショップ」では、参加者は、日頃社会的弱者と見なされがちな視覚障がい者に守られる

ことを経験しながら、平時と異なる役割を持って探検や課題解決を体験する。

- 災害時の心がまえや行動指針を自ら見出すシミュレーションとしての効果のほか、日頃から声をかけあう重要性や、災害時に私財や物品確保よりも自分や他人の安全確保を優先する発想などを身に着ける効果が想定されている。

災害の視点を取り入れることで、取組の幅が広がる

- 「防災」の視点を取り入れることで、「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」の活動の幅も広がり、新たな開催場所や参加者の増加などにつながっている。

平成 27 年 2 月からは、積水ハウス株式会社との共創プロジェクトとして、グランフロント大阪で開催されている「対話のある家」において、「防災」をテーマとした企画を行っている。

周囲の声

- 職場の訓練でも暗闇の中を進み救出する訓練を行うが、そこでは『いち早く救出し、いち早く次の現場へ向かう』ことが最重要とされていた。しかし、ダイアログ・イン・ザ・ダークを経験し、『救出した人のもとへ救急隊が着くまで傍にいてあげよう』と感じた。(体験された消防士)
- 同じワークショップに参加した、他のフロアーの別企業の方と、平时にエレベーターで会った時にも会釈をするようになった。防災に関する事態にも安心してやり取りができる。(ワークショップに参加した会社員)
- 「彼女は『津波の中を見ず知らずの方がトラックに乗せてくれ、生きることが出来た。人間は他人を助けることができる生き物だということを学びました』と言いました。壮絶な彼女の体験を前に参加者たちが言葉を失う中、アテンドスタッフは『そんなことも知らなかったの?』と返しました。視覚に障がいのあるアテンドスタッフにとって平時はなく、毎日が非常時であり、誰かに助けられているからです。それを聞いて参加者の彼女は『今度は自分たちが受け入れる(助ける)側になりたい』と言ってくれました。」(ワークショップの来場者とスタッフ)